

写真5 A.C.ショウ
軽井沢 土屋写真館提供



写真6 アーサー・ロイド
日本聖公会教務院提供



*Edw. Bickersteth
Bishop*

写真7 エドワード・ビカステス
日本聖公会教務院提供



初代 H.J. フォス 監督

写真8 ヒュー・ジェームズ・フォス
神戸昇天教会百年誌
「主とともに」より転載

ハナ・マリア・バーケンヘッ드의生涯

菊池眞理

第一章 ストックポート時代（「研究紀要」第四十六号に掲載）

第二章 ロンドン、南アフリカ、そして日本へ

1. ヴィクトリア朝中期における女性の社会的地位

ヴィクトリア朝社会の価値基準では、女性が無制限の社会的に認められる「就職」は結婚であった。しかしその一方、当時、統計的に見て結婚不可能な「余分の女性」は五十万人存在したとする報告がある。例えば、一八五一年のセンサスによれば、男性に対する女性の数の過剰分は約五十一万人（十五才以上約五十六万人）である。この過剰女性が英国人口に占めていた比重については議論もあるが、独身男性が不足していたということは確かな事実であろう。その原因として挙げられているのは、結婚可能な年齢で健全な肉体の男性がアメリカをはじめとする植民地への大量移住、海外での軍役、一般に高い男性の死亡率、さらには彼等の独身生活享樂、晩婚の傾向等である。

女性の有給雇用にたいする偏見が支配する時代に、文筆家で成功したごく少数の女性を除いて、中流階級の女性が生計を立てる唯一の道は、ガヴァネスと呼ばれる住み込み家庭教師になることであつた。このいわゆる「ゼントル・ウーマン」の経済的困窮、とりわけガヴァネスの姿が人々に強烈な印象を与え、社会問題として取り上げられ、フェミニズムへの一つの足がかりともなつたのである。そのほかにも当時の一般的に低劣な女子教育の実態とか、既婚女性が相続権には法律上の権利が全く認められていないなどの女性が置かれていた差別的な状況がフェミニズム運動の成長する背景となつてゐる。

「ゼントル・ウーマン」の状況を改革する動きは女子教育改革運動と女性の雇用の機会を拡大する運動とを開始させた。教育改革では、一八四八年のクイーンズ・コレッジの開校を皮切りに、十九世紀末にはオックス・ブリッジにおける女子学寮開設へと進展した。雇用問題に於いてはフェミニストの指導の下に種々の職業開拓や技術上の訓練が行われた。医業といった専門職が女性に門戸を開くべきであるとする要求もなされた。看護師のレベルアップ、電話交換手、店員、事務員への女性の進出も目立った。一八七〇年以降の初等学校教育の急激な膨張は、教育職への女性の進出を實現した。従つてロンドンの師範学校を卒業したバーケンヘッドが、初等教育の教師職にあつたということは当時の女性進出現象の一端を具現しているということになる。

ロンドンでのバーケンヘッド

ストックポートでのハナ・マリア・バーケンヘッドの確かな足跡を辿れるのは一八七一年のセンサスまでである。當時は高等教育については奨学金で行われることが一般的であり、たとえば、日曜学校などで教師見習生の仕事をしてき

た生徒は十八才で女王の奨学金の受験資格が得られた。受験の有無はとにかくとして、彼女がロンドンに住むようになったのは一八七二、四年前後であろうと推察できる。しかしロンドンの師範学校に進学したハナ・マリア・バーケンヘッドの足跡は一八八一年の国勢調査で捉えられるまで明らかにっていない。ロンドンの師範学校（ノーマル・スクール）で学んだという記述はあるものの、それが具体的にどの学校であるのか、現在まで判明してない。

この国勢調査（表8）によれば、彼女は母娘によって営まれている下宿（写真9）に三人の同宿人と居住していた。当時、このイズリントン区はロンドン郊外の農村であった。しかしすでに鉄道が敷設され、ロンドン市内に通うのには便利であったようである。また、この下宿屋と背中合わせの建物群、モレー・ロード一番地には英国国教会の聖マルコ教会が建っており、現在も日曜日には礼拝が行われている。しかし、この教会には彼女に関する記録は何も残されていない。

地理的にはこの教会とは近隣の場所にあるロンドン・メトロポリタン文書館、及びイズリントン区の記録文書が保存されているフィンズベリー図書館でも調査したが、この時期の小学校教育、或いは教員に関する保存史料は少なく、僅かに保存されていた当時の小学校教員記録に彼女の名前は見つけることはできなかった。従って、彼女が勤務した小学校がどこであったのかということは現在までのところ判明していない。



写真9 バーゲンヘッドの旧居
(向かって右手の入り口が23番地)



ロンドン、モレー・ロード街

Dwelling: 23 Moray Rd					
Census Place: Islington, London, Middlesex, England					
Source: FHL Film 1341060 PRO Ref. RG11 Piece 0276 Folio 103 Page 6					
	Marr	Age	Sex	Birthplace	
Mary A. PIERCEY		W	55	F	Edmonton, Middlesex, England
Rel: Head					
Occ: Letting Furnished Apartments					
Kate PIERCEY		U	32	F	Holloway, Middlesex, England
Rel: Daur					
Occ: Letting Furnished Apartments					
Orlando KEYWORTH		U	27	M	Cirencester, Gloucester, England
Rel: Boarder					
Occ: Clerk Mudies? Library					
Hannah M. BERKENHEAD (sic)		U	24	F	Stockport, Cheshire, England
Rel: Boarder					
Occ: Teacher in Elementary School					
Eliza A. Saunders					
Rel: Boarder					
Occ: Teacher in Elementary School					

表8 1881年 英国センサス

2. 南アフリカでの活動

レイディーズ・アソシエーション（以後L Aと表記する⁽¹⁾）の年次報告書は彼女が日本に派遣される前に、南アフリカで働いたという経歴があることを記録に留めている⁽²⁾。しかしこの南アの活動について具体的な事実は何も判明していない。彼女がL Aのメンバーとなったのは日本に派遣されることが決定された後のことであるから、それ以前の活動がL Aの記録に含まれている可能性はない。従って彼女の活動記録を見つけられる可能性は僅かにS P G⁽³⁾（英国国教の宣教団体の一つ、前編参照）の活動記録——彼女がこの宣教団体から派遣されていた場合——或いは英国の南アにおける植民地関連の文書に残されているのみである。

ロンドンのウォーター・ルーにあるS P Gの記録保存所、パートナーシップ・ハウスにあるS P Gの一八八三―一八八八年間の年次報告書で協会が援助している在アフリカ十一の主教区、駐留地、並びにそこで働いている宣教師についての報告書には彼女の名前を見つけることはできなかった。彼女がロンドンに居住していた事実が記録に残っているのは、一八八一年である。南アに在住した可能性があるのはこの年を挟む二つの時期——ロンドンの学校を卒業したと思われる一八七六年前後から一八八〇年まで、或いは一八八二年から来日した一八八八年までの期間——である。しかしながらこの二つの期間に発行されたS P Gの年次報告書に記載された南ア在住の教師のリスト中に彼女の名前を見つけることは出来なかった。

日本に到着してから彼女がL Aに送付した書簡⁽⁴⁾の文面から判断して、彼女が来日して以後も南アに在住の人々との交流があったことは確かである。その内容から推察すれば、彼女が南アに滞在していたのは、前述の二つの期間の中、後半の時期、即ち一八八二―一八八八年である可能性が高いと思われる。また、その書簡に記載されている知人二人の住

所から、彼女が在住していたのは東ケープのキング・ウイリアムズ・タウン、或いはウムタタ近辺であった可能性が最も高いと考えられる。

ローズハウス図書館にはSPGDシリーズという分類名でSPGが世界各地に派遣した宣教師から受け取った書簡を大型スクラップブックに貼り付け、宣教師の滞在国別、年次別に分類して冊子として製本したものが保存されている。著者は二〇〇五年七月にこれを閲覧した。限られた時間の中での調査であったため、彼女が滞在した可能性が最も高いと思われる東ケープタウン、それもキング・ウイリアムズ・タウン、とウムタタ近辺からの一定の書式で発信されたもの、一八六〇年～一九一六年までのファイルに限って目を通した。それ以外の私信のような、全て宣教師の手書きによる報告書は、報告者以外の個人名が記録されている可能性は低いと判断した。

当時ウムタタにセント・ジョンズ・ミッション（聖ヨハネ伝道団）という伝道団体が存在していた。上記のDシリーズの文書を通読すると、その伝道団からは本部宛に送られた報告書の多くはキング・ウイリアムズ・タウンを経由していたと推察される。これらの報告書には宣教師に対する給料等の支払、信者数、宣教師の関連行事、付属学校関連の情報等が一定の書式で報告されている。閲覧した限りでは、それらの文書には報告者以外の教師、宣教師の個人名は記載されておらず、従ってバーケンヘッドの名前も見つけることは出来なかった。

バーケンヘッド個人に関する調査には直接の関わりはないが、一八八〇年のファイルに、ウムタタのセント・ジョンにおける原住民部族の暴動についてのパンフレットが保存されていて、当時のケープタウン近辺の不安定な治安情勢などを伝えている。

3. 英国国教会の海外伝道

国教会の海外宣教活動はローマ・カトリック教会に比べるとはるかに緩慢であった。その状況に大きな変化が起こったのは、福音主義が浸透し始めてからのことである。最終的には非国教派になったメソディズムなども最初は国教会内の一種の革新運動として生まれたのであるが、国教会内部の活動を活性化しようとして起こってきた動きを総称して福音主義と呼んでいる。ケンブリッジ大学を中心とする改革の動きもこの福音主義運動の一環と見ることができる。この福音主義の運動の中で最も重点的に取り上げられたものの一つが植民地に対する宣教活動であった。その中で植民地の原住民のための改宗運動が提唱された。それは特に初期において、植民者に生命の危機を及ぼしかねない原住民を改宗し、宣撫するという目的で行われ、植民者の身の安全を図るために性急に開始されたものでもあったが、一七九二年にバプティスト宣教協会、続いて一七九五年にはロンドン宣教協会が設立されるという組織的な取り組みがされるようになった。ただし、このような経過を見る限り、これらの布教活動が彼等の認識、或いは建前としてはキリスト教徒の使命感に基づくものであると理解されていたにしても、その本質は、英国の植民地支配活動の一環であったことは疑う余地もない。

国教会は一七九九年に自分達だけの団体であるCMS⁽⁵⁾、一八〇一年にSPGを設立した。次いで一八一八年にメソジスト宣教協会が設立され、一八二四年スコットランド国教会の外国宣教委員会がインド亜大陸で宣教を開始し、新興国アメリカもビルマ、インドに宣教師を送った。

十九世紀、二〇世紀前半は、キリスト教会史上最も盛んに宣教活動が行われた時代であった。この時代の宣教活動は、

それぞれの政府ではなくそれぞれの教派が設立した協会により、また教会信者の自由献金によって行われたということが特徴である。また、この宣教活動はカトリックよりもプロテスタント諸派において活発であったが、この時代のヨーロッパの社会情勢は、一方では懷疑主義や無関心が蔓延し、他方では全体主義の色彩が濃く、反キリスト教的な独裁政權に支配された時代だったことも注目に値する。

このような多数の宗派によって広範な地域におよぶ宣教活動が行われた結果、キリスト教は今までに例を見ない人数と人種の人々、異文化を持つ人々に伝えられ、各地に根を下ろした。また、その宣教の目標は、現地の、その土地固有の教会設立と言うことに置かれていた。

国教会は英国の植民地が世界に広がったことにより、一民族の信仰から、地域に限定されない普遍的なキリスト教に変貌していった。かつては北アメリカとインドに移住した英国人入植者の霊的平和を維持することが唯一の目的であったSPGの宣教活動は、アメリカ植民地が独立し、合衆国が成立すると、この地を宣教活動の範囲から除くことになった。アメリカ合衆国では、英国国教会に代わって、プロテスタント主教制教会が設立された。

このアメリカにおける主教制教会は後のアングリカン・コミュニオン（英国国教共同体）の最初の構成メンバーになるのだが、母国イギリスにたいする忠誠心を捨てないでカナダに移住した人々のためにカナダ・イングランド教会が最初の海外主教区として、ノヴァスコシアに設立された。その後の一七〇年間に二五〇以上の主教区が設立されアングリカン・コミュニオンに加わっている。

4. 英国国教の日本伝道

日本本土での最初の伝道は前記CMSが派遣した宣教師エンソウにより一八六九年に開始された。これは琉球海軍伝道会が解散する際にCMSに寄贈した六百五十四ポンドが基金となっている。

日本がペリー提督の来航によって開国したのは周知の通り一八五三年である。そして一八五八年には、米国総領事タウンゼント・ハリスと幕府との間に日米修好通商条約が締結された。

一八七三年はそれまでの十四年間に匹敵するほどの多数の宣教師——二十七人——が日本に到来したと言われている。

この時期に米英からの来日宣教師数が激増した理由について『日本におけるヴィクトリア期の宣教師』の著者パウルズ⁽⁶⁾は、米国については南北戦争が一八六五年四月に終結し海外への宣教活動に関心が向けられるようになったことであり、英国については、この国の宣教活動の拡大は常に経済並びに外交の発展と密接な関係にあり、一八七〇～七四年に絶頂期を迎えた産業発展が海外における活発な活動を引き起こしたことであると述べている。またこの時期の世界規模での交通網、通信網の発達も米英両国の海外における宣教活動に大きく寄与した。例えば、スエズ運河、アメリカ大陸横断鉄道の完成は共に一八六九年であり、それ以前に米欧間、インド極東間の電信による通信網が開通していたというような諸事情も見落とせない。

この事態に日本国自体が関わった要因としては、一八七三年のキリスト教禁制の高札撤去という方針転換が挙げられる。長崎近辺でキリシタンが迫害にあったというエンソウの目撃報告が欧米に大きな反応を引き起こしたこと、一八七一年～七三年の二年に及ぶ岩倉使節団が海外訪問中に敵意に満ちた欧米の世論に遭遇したという事実は明治政府にその反キリスト教的な態度を改めさせる効果をもたらしたのであった。

英国は日本との交流については長年の経験もあり、建国後間もない若い米国よりずっと自分たちのやり方が洗練され、抑制のきいたものであると大いに自信を抱いていた。しかし日本に到着した英国人宣教師は、米国プロテスタント派宣教師が既に一八五九年に到着しており、その数も十七名に達しているということを知って衝撃を受けた。しかも米国人宣教師は日本宣教にむけて十分な体勢を整えてもいたのである。たとえば、ヘップバーンの編集による英和、和英の辞書が一八六七年に出版され、米国宣教師は言語の知識のみならず日本の慣習などについての知識も既に十分に身につけていたのである。このような時代的背景もあって、SPGという宣教団体は米国からの宣教団体に対してよりむしろ、英国国教会派——アメリカ・主教制教会を含めた——に対しての競争意識が強かったと言われている。

エンソウの帰国後、一八七一年までに英国国教会派宣教師は六人となっていた。更に一九〇〇年には百人以上の英国人宣教師がこの国の各地に住むようになった。

5. 「芝派」三人の宣教師——シヨウ、ビカステス、ロイド

ヴィクトリア朝にあたるこの時期に英国国教会から派遣され来日した宣教師の中からパウルズは三人の宣教師、シヨウ、ビカステス、ロイドの活動を特に「芝派」——東京、芝に居住したことから——の宣教師として取り上げて描いている。彼等のうちの二人、シヨウ、ビカステスはハナ・マリア・バーケンヘッドに直接の交流があったことは明らかである。また、ロイドについては、記録には表れていないが、両者は日本アジア協会の活動を通して交流があった可能性がある。英国のSPGという宣教団体から当時の日本に派遣された宣教師の中でも代表的存在であった彼等の活躍を理解しておくことは、バーケンヘッドが活躍した時代的背景を理解するためには不可欠であると考え、ここではまず芝派の

宣教師達の日本における活躍について簡単に触れておきたい。

アレキサンダー・クロフト・シヨウ(一八四六―一九〇二) 写真5

一九八三年に英国で出版された『クラン・シヨウの歴史』という書物は、ケルト民族であるシヨウ一族の来歴を記した歴史書である。この一種の壮大な血統書ともいべき記録によると、本論のアレキサンダー・クロフト・シヨウ(以後、A・C・シヨウと表記する)はカナダに移住したシヨウの一族から派生した家族に所属している。アメリカ駐留軍の連隊長であったアレキサンダー大佐の弟、アエネアスをその祖としている。彼の第二子、アレキサンダーがアレキサンダー・クロフト・シヨウの祖父である。父もまた軍人で、陸軍少佐というのが彼の生涯で最終的に到達した位である。

A・C・シヨウはカナダ・シヨウ家の嫡子として一八四六年、トロントに生まれ、軍人を志したが、体が弱かったため軍人の道を断念し、聖職の道を選ぶことになった。英国国教派の立場を取るカナダ上流階級の人々が、自分たちの子弟を学ばせる大学を設立した際に、シヨウ家は自分の家の牧場の一部を大学の敷地として提供した。それが今日のトロント大学・トリニティ・カレッジの母体の一部となっている。A・C・シヨウはこのカレッジの神学部を卒業し、学士号並びに修士号を取得後、英国国教会の聖職者に任じられた。

一八七二年十二月二十日、ロンドンのアルバート・ホールで一人の英国人主教を記念する大集会が開催された。その前年にメラネシアのヌパク島で原住民に殺害された若きイギリス人主教の死を記念するものであった。尤もこの宣教師の受難は現地人と英国人の文化的差異から生じたものであり、英国人の異文化についての無知が招いたものといつてよい。

SPG、CMSの両宣教団体はこの集会の参加者の中から海外で宣教に従事する有志を募った。その一人がロンドン

留学中の若きカナダ人、A・C・シヨウであった。ロンドンにおいてカツ博士のもとで牧会上の訓練を受けていたシヨウは、上記の集会に出席し、日本宣教を志願したのである。かれは、外務大臣グランヴィルから日本駐在イギリス公使館付牧師に任命され、その身分はイギリス帝国官吏であった。その任用期間はパークス公使の時代から、パークスの秘書官を務めていたアーネスト・サトウが公使を勤めるようになった時代にまでに及んでいる。

シヨウはウイリアム・ライトと共に一八七三年七月二日にリヴァプールを出発、同年九月二十五日に横浜に到着した。在日英国公使パークスから「日本人と接触が出来るように居留地に住むことは避けること、点在する港町ではなく政治、経済、教育の中心である東京で布教に従事するように」という助言を受けた。このパークスが示した指針はいわゆるプロパガンダ型と形容される宣教のスタイルの要素を多く含んでいる。「この型の宣教はキリスト教社会が非キリスト教社会に対して絶対的優位に立つという観念を前提にしており、キリスト教の宣教はそのまま西欧文化の伝達、搬入であった。」⁽⁷⁾この点において、キリスト教社会の絶対的優位はあり得ないとするいわゆるミッシン型をとるCMSの指針とは対照的である。

当時のシヨウの給与は年間二百五十ポンドで、二年以内に日本語が流暢に話せるようになった場合は三百ポンドに昇給することが約束されていた。彼は三田寺町の大松寺にライトと共に居住した。どのような経過であったのか明らかではないが、彼は福沢諭吉との交流を持ち、一八七四年二月から福沢家の子供達に英書の指導をはじめた。福沢は一八七四年四月には自宅の傍らにシヨウのために住居を建築し、彼を慶應義塾の教師として雇用した。シヨウはリユーマチの持病があり、病弱であったため福沢家の世話になることも多かったようだが、一八七五年十一月に妻、カテルを迎えてからは心身共に安定して仕事に励むことが可能になった。彼の結婚については、SPGとの間に多少の軋轢があったよ

うであるが、このやりとりの中で彼は貧しい家庭に育った女性を妻にすることで宣教生活に耐えられると主張しており、この事実は注目に値する。⁽⁹⁾ 彼は一八七六年に芝に自宅を新築移転したが、福沢との交流は一九〇一年に福沢が他界するまで二十七年間続き、彼等は深い信頼と友情とで結ばれていた。シヨウの仕事は英国人信徒のための礼拝、日本人、特に慶應義塾の学生達に対する伝道であったが、次第にその活動範囲は神奈川、静岡、名護、千葉などに広がり、一八八八年にはビカステス主教から東京地方の大執事（アーチ・デューコン）⁽¹⁰⁾に任命されている。

幕末から明治初年にかけて欧米諸国が日本国と結んでいた条約は、治外法権を認めさせるなど全くの不平等条約であった。特に、日清戦争時における日本軍の行動は報道を通じて欧米諸国に伝えられ、国際問題に発展し、日本政府に大きな打撃を与えた。その結果、当時まともにかけていた米国との条約改正を反故にする恐れさえあった。この時期に帰英中であつたシヨウは一八九五年二月一日付けの『タイムズ』紙に日本の立場を擁護する趣旨の寄稿を行った。⁽¹¹⁾ シヨウがこのように日本の立場を擁護するに至った背景には日本人に対する理解と愛情があつたことは確かではあるが、同時に彼の英国国教会宣教師としての良心、矜持も見逃すことは出来ない。パウルズはこのようなシヨウの貴族的で保守的な性格は他のSPGの宣教師、ビカステス、ライトなどのハイ・チャーチマン⁽¹²⁾に共通するものと述べている。更に、シヨウ家は独立戦争後カナダに移住した行為が示すごとく王党派であること、また出自に由来すると思われる貴族的性格は自分が教化した日本人の信者、或いは同僚に父性的な敬意を払うことを惜しまなかったことにも表れていると指摘している。⁽¹³⁾ 彼は同僚ライト（アイルランド出身）、ロイド（ウエールズ出身）と共にケルト民族の血を引いており、人々に対する情愛の深さはこの民族特有の気質にも起因していることを感じさせる。現在残されている彼に関する多くの文

献、書簡類などにも彼の人となりを示すエピソードが幾つか残されている。⁽¹⁴⁾

世界各地で活躍したSPGの宣教師が本部に宛てた書簡は現在オックスフォード大学・ボードリアン・ライブラリーの分館の一つであるローズハウス・ライブラリー内の史料保管所に所蔵されている。シヨウの書簡もDシリーズ（受信書簡）、またその写しであるCLRシリーズ（受信書簡写し）として多数が保管されている。それらを通読すると、彼の書簡は単に事務上の報告、或いは連絡といった事務的な性質のものに止まらず、私情がにじみ出たものも多く、それらはいずれも彼の豊かな人間性を示すものとなっている。

彼が在日中に最も力を注いだのは宣教活動であったことは当然であるが、中でも特に聖アンデレ教会の建設、聖教社神学校の設立、慶応義塾におけるキリスト教教育が挙げられよう。彼が慶応で教化した学生の中からは後年、憲政の神様と呼ばれた尾崎行雄に代表される逸材を輩出した。明治十年秋の記録に依れば、シヨウ、ライト両者の来日以来、僅か五年間で一五〇名近い受洗者があったことがSPG本部への報告に残されている。

宣教活動以外にも彼の業績としては、日本の女子教育への貢献——東京女学館の創立への協力——、社会福祉活動——小笠原諸島の子供達の世話、被差別部落における活動——が挙げられる。

また彼は日本において別荘地軽井沢を開いた恩人として一般の人々には知られている。彼が軽井沢と関わりを持つようになったいきさつについて簡単に述べると以下の通りである。

一八八五年、工部大学講師ジェームズ・メイン・ディクソンと共にこの地を徒歩で旅行中に彼は浅間を背景にした軽井沢の景観を目にした。しかしその当時、軽井沢宿は参勤交代制度が廃止され、更に新碓氷道が開通するという時代の激変によって人々の暮らしは激変し、廃れがかった。この窮状を見たディクソン、シヨウという二人の外国人の策

動により、凍結状態であつた鉄道省の碓氷線計画が見直され、外国人避暑地としての軽井沢が誕生する運びとなつたのである。現在旧軽井沢地区の日本聖公会軽井沢シヨウ記念礼拝堂入り口に彼の記念碑が建てられ、この村の人々のシヨウに対する厚い謝意を記録に留めるものとなっている。

シヨウは一九〇二年三月十三日に五十六才で逝去した。ビカステス主教の後任として主教に任命されることは彼自身も望んでいたことではあつたであろう。それはまた彼を知る人々の関心事⁽¹⁵⁾でもあつたにもかかわらず、大執事としてこの世を去つた。彼が主教に叙階されることは彼の業績、人物、学識から判断して当然のことと思われたが、門閥、学閥——オックス・ブリッジの出身ではなく、国教会役職者の係累も持たなかつた——共に彼は不利な立場にあつた。ビカステス主教の跡を継ぎ南関東教区の主教に就任したのは大阪教区主教であつたウイリアム・オードリー⁽¹⁶⁾であり、オードリーが去つた大阪教区の後任は神戸在住のヒュー・ジェイムズ・フォスであつた。

シヨウが一九〇二年に逝去したときの英字新聞は「物静かで、控えめで、優れた判断力を持ち、人の気持ちに共感し、機敏な性格の持ち主であつた彼は、友情を和解させる仕方を心得、外国人居留者の中で故アーチ・デーコンほど全ての階層の人々に愛された人はなかつた。」(『ジャパン・レジスター』)と伝えた。宮内省は我が国の女子教育に対する彼の貢献をたたえ、未亡人に一千円の恩賜金を追贈した。⁽¹⁷⁾生涯、主教の座に就くことはなかつたがシヨウこそは日本人の記憶に残る宣教師の一人であると言えるよう。

アーサー・ロイド(一八五二—一九一一) 写真6

ロイドは一八五二年四月十日に英国軍人であつた父フレデリック・ロイドの滞在先、インド、パンジャブ州、シムラ

で生まれた。父は一八五六年に死去。ロイドは母親の母国ドイツに移り、初等教育を受けた。その後、英国のグラマ
ー・スクールに入学。一八七〇年にケンブリッジ大学、セント・ジョーンズ・コレッジで三年間学んだ。その後、ピータ
ーハウスに所属、一八七四年に優秀な成績で卒業後、学士号を取得。一八七七年には修士号を得て、ピーターハウスの
フェロウとなり⁽¹⁸⁾首席牧師、図書館員の仕事をこなした。彼の略歴が物語るように彼はケンブリッジでも並はずれた秀才
であり、学者としての将来を約束されていた。しかし彼はケンブリッジに残る道を選ばず、インドで布教すべく、ドイ
ツにわたり、チュービンゲン大学でサンスクリット語を学んだ。彼が日本に赴任する直前の仕事は、サフォーク州ノー
トンの教区牧師でありハンストンの主任司祭であった。

彼は一八八五年、三十二才の時に家族と共に来日、辞任したライトの跡を継いだ。当時帰英中であつたシヨウはライ
トの後任にロイドが任命されることに何故か反対であつた。しかしこの二人は初対面以降、驚くほど馬が合うようにな
つたとパウズは記している。両者が親交を結ぶようになったことについては、共に英国植民地の出身であり、オック
スフォード運動に肩入れしていたという理由もあつたようである。彼はシヨウ同様に居留地に住むことは避け、メソジ
ストの熱心な信者であつた津田仙⁽¹⁹⁾の世話で麻布に住まいを見つけた。

来日当時ロイドは六百ポンドの借財を母国に残していた。これを支払うために彼は副職として教師の仕事を希望した
が、新任のピカステス主教はそのような行為は英国紳士また宣教師としてふさわしくないと反対した。しかしシヨウと
日本人の同僚はロイドを支援し、彼が働けるような私塾を設立した。その後一ヶ月も経たない中に、ロイドは福沢諭吉
から慶応での教育を依頼され、慶応で教えるようになったことを手始めに、半年経たずして五つもの学校で教鞭をとる
うようになった。その結果彼は借財を一年で返済した。

福沢はロイドを英語学部長の地位に据え、一八八六年四月から慶應義塾における英語教育を全て統括する地位に就けた。彼は英語教育のみならず学内外での宣教活動にも熱心に取り組んだ。その結果として、学内のクリスチャンの数は教員、学生ともに増加した。一八八七年六月に福沢は三田の学内に二階建ての家をロイドのために建てた。この三千円をかけて建築された大きな西洋館の中にロイドはチャペルを設け、これは後に喜望教会へと発展することになった。

ロイドは教職を通じてキリスト教——英国国教——を広めるという希望を抱いていた。実際に一八八七年までに彼の希望に添って六人の外国人教師が慶應で働き始めていた。しかしその年を境に新たなナショナリズムの動きが学生間に高まりを見せ始めた。そのために、宣教師が同時に教師の任務を勤めるということが困難になったのである。この動きは日本の政治家の中に芽生えてきた反外国主義の芽生えと同調する動きも見せた。

ロイドは更なる困難に遭遇する。福沢は一八八七年に日本最初の私立大学開設を表明したのだが、文学、理財、法律の三科からなる慶應義塾大学部は一八九〇年（明治二十三年）一月に開設の運びとなった。福沢はこの大学開設にあたり、主任教員の人選を、これまで最も信頼し、重用してきたロイドではなく、米国ユニテリアン派宣教師として最初に来日したナツプに依頼した。

この経過については従来の福沢研究、慶應義塾史研究、日本のキリスト教史研究においては未発掘であった史料を駆使された白井堯子氏による綿密な研究がある。この研究で明らかになったことは、福沢の方針を受け継いだ矢野文夫²⁰⁾が、英国ユニテリアン協会にたいして宣教師派遣を働きかけたことがきっかけになったということである。そしてその英国国教会宣教師からユニテリアンに乗り換えた福沢の方針変更の底流には、メソジスト派宣教師の宣教、その後の英国国教会派宣教師、或いは彼等の説く教義について当時の日本の知識階級の人々が抱いていた複雑な思いが読み取れる。

英米との交流が始まる以前から日本は既にポルトガル、オランダ、スペイン等を通して西欧文明と接触を持ち、明治期に入ってから欧米先進国の思想、哲学も伝来していた。また、宗教では仏教のように完成された宗教も広く民衆に浸透していたのだから、英国国教の教義を全面的には受け入れられないという思いを持っていた人たちが存在していたとしても不思議ではない。

福沢の米国留学中の次男捨二郎が一八八七年十一月にボストンで行った演説で明らかにしているよう高い教養を身につけている日本人の中に当時の宣教師に対して抱いた、共通の、鬱屈した思いがあつたのも当然であろう。

「日本に來ている外国人宣教師達の一番の問題点は、日本人に共感を抱いていないことである。彼等は、日本人を自分たちより一段低い下等な人間と見なし、日本人に対して、日本固有の宗教、哲学、道德を破棄してキリスト教を信ぜよとすすめている……」

ユニテリアニズムの持つ合理性——原罪や三位一体論に反対、イエス・キリストの神性を否定するなど——、功利主義、実学の重要性の認識などが（現世の幸福追求型心情の）福沢をふくむ当時の日本の知識層に受け入れ易かつたことは想像に難くない。

たしかに福沢はロイドのみが宣教師の中では唯一の学者であることを認め、睡眠時間も惜しんでエネルギーに誠心誠意、学生教育に心血を注ぐ彼の姿に深い敬意を払つてもいた。しかしながら、若い日本国の将来を見据えて、慶應義塾大学部開設に当たろうとしていた福沢にはこの時、極めて冷静な判断が働いたのであろう。ロイドは大学部開設に当たって自分が中心的な役割を担うことを当然のこととして期待し、またその旨をSPG本部にまで書簡で伝えてい

たが、その返答を得る以前にナッブの慶應義塾における活動が始まったのである。

一八八九年三月、ロイドは慶應義塾との関わり方を変える決心をした。彼はSPGに休暇を求め、トロントのトリニティ・コレッジから申し出のあった教授職の仕事を引き受ける許可を求めた。彼には重い病を患う妻の為に移住を希望するというもう一つの理由もあった。彼は、SPGからの回答を手にする以前に日本を去り、カナダに行くことを決断した。六年間に亘るSPG宣教師としての生活に別れを告げ、彼は一八九〇年八月七日、慶應義塾教員²³を一名同道して横浜からカナダに向かって出帆した。

しかしカナダで妻を見送ったロイドは三年後の一八九三年秋にカナダの職を辞して再来日し、慶應義塾文学部二代目主任教員に就任した。ロイドを高く評価していた福沢は、当時としては破格の月給二百五十ポンドを支払った。ロイドは日本での教職は自分に最適の仕事であると再認識して、再び慶應の教壇に立てたことを大きな喜びと感じたようである。彼は慶應義塾の女性教員であったファルロットと再婚した。

日本帰国後に、再度、SPG所属の宣教師に戻りたいという希望が容れられなかったロイドは一八九四年、来日中のマキム主教の勧めで米国聖公会に所属した。そして一八九八年四月に慶應義塾を退職し、翌年には立教学院の総理に就任した。これはウイリアムズ主教が日本におけるキリスト教主義による教育事業の必要性を本国アメリカに説き、明治七年に築地に開いた私塾が基礎となって発展したものである。一九〇三年四月、ロイドは立教を去り、同時に米国聖公会からも離れた。同時に彼は小泉八雲の後任者として東京帝国大学文科大学で英語、英文学の講義を一九一一年十月二十七日に逝去するまで行った。この間、一九〇二年には東京高等商業学校でも教鞭を取った。

彼は日本文化に深い興味を持ち、日本文化の紹介に努めた。また晩年には特に浄土真宗の学問的研究に心血を注ぎ、

仏教文献に通じた学者として認められる存在となった。彼は仏教とキリスト教の相似性——浄土真宗における他力本願、慈悲など——を指摘し、阿弥陀の物語はキリストの生涯の東洋的改作であるということを証明しようと試みた。²⁴⁾ この試みは成功せず、当時は多くのキリスト教徒からは異端視された。しかし彼のこの試みは、現代の比較宗教学の視点からその価値を再認識されてもよいのではないだろうか。ロイドの母校であるケンブリッジ大学・ピーターハウスのチャペル内に彼を記念する銘板が取り付けられている。

エドワード・ビカステス（一八五〇—一八九七）写真7

ビカステス家は北方ウエストモーランド地方の出身で、領主を務めたその家系からは十三、十四世紀にはその地方を代表する国會議員を務めた人物も二名出ているという名家である。父エドワードは五人兄弟の四番目であった。長男は水死、次男は教養ある聖職で、多くの賛美歌を作った人であり、その息子がリポンの主教となっている。三男はケンブリッジの数学首席を占め、控訴院判事になり、議員になった。五人目のロバートはリヴァプールで最初の外科医になった。四男のエドワード・ヘンリーが本論の主教エドワードの父になった人である。彼は十四才でロンドンに出て郵便局の事務員、ついで事務弁護士となった。一八一五年に高収入の事務弁護士の仕事を辞して聖職になった。当時西欧のフロンティアであったアフリカで伝道師達が残酷な運命に出合っていたことがその動機であった。彼はすぐにでもアフリカに送られることを希望していた。この父親の学問好きの性格と職業選択が明らかに彼の息子エドワードに影響を及ぼしたと見られている。彼は一八五〇年六月二十六日に父エドワード・ヘンリー・ビカステスの長子としてノーフォーク、バニンハム司祭館で生まれた。彼は父の転勤によってロンドンのハムステッドに移り住み、一八六二年—六九年まで近

くにあるハイゲート校に通った。幼時から秀才の誉れが高かった彼は長ずるに及んで頭角を現し小学校卒業時には数学、神学の優等賞、知事からの金賞など多くの名誉を受けた。

一八六九年秋にケンブリッジ・ペンブルク・コレッジに入った。一八七九年にBAを、一八七六年にMAを取得した。しかし、一八七三年の卒業時に古典学のトライポス（卒業試験の一種）でファースト・クラス（上級の卒業資格）をとれなかったことは彼にとっては相当な心の痛手になったようである。彼はその後勉学に励み、一年後、ファースト・クラスに合格した。

一八七三年に執事、七四年に牧師に叙階され、七三―七五年にハムステッドの聖三一教会の牧師補を勤めた。一八七五年にはペンブルク・コレッジのフェロウに選ばれた。この資格は十八年間継続するのだが、実際に彼が講義を行ったのは、最初の二年のみであった。当時ケンブリッジでは著名な宗教指導者であったウエストコット教授の下には熱心な学生、研究者が集まっていたが、彼は、インドのような異教が深く根付いている土地にはそれにふさわしい優秀な人材を派遣しなければならないと説いた。その提唱に呼応して北インドへの伝道団、「デリー行きケンブリッジ伝道団」が結成されたとき、ビカステスはその初代の団長に選ばれ、一八七七年にデリーに着任した。インドでの滞在は五年という短い期間であったが、その間に彼を中心とするミッションは、劣悪な環境でコレッジを設立するなど知的レベルの高い人々を対象に成果を挙げた。しかしビカステス自身は病を得て一八八二年に帰国し、サフォークのフラムリンハムの牧師に就任した。その後その職を辞して、再度インド行きを計画中に日本での主教就任を依頼された。これは日本最初の英国人主教であったプール師の死去に伴う人事であった。彼は、主教に叙任され一八八六年に来日した。

彼が日本で果たした最も大きな役割はSPG、CMS、米国聖公会を統括し日本聖公会を組織したことである。それ

は彼個人の力だけではなく、米国聖公会出身のウイリアムズ主教との協力があつてのことであつた。

米国聖公会から派遣され、日本聖公会初代主教となつたウイリアムズ主教は、聖人的風格を備えて万人の尊崇の的となつていたが、今なおその遺風を慕う人も多い。「ミニムム・プリンシプル」の生活信条を固守し、粗衣粗食を貫いた彼の姿は弟子の足を洗つたキリストの故事を彷彿させるものがある。彼は全ての収入を伝道のために捧げた。彼の献金を基に設立された京都聖ヨハネ教会は当時の名建築として高い評価を得、現在、愛知県の明治村に保存されている。

このウイリアムズ主教の協力、加えて当時の日本におけるキリスト教界での内的——英国国教系の三教派、CMS、SPG、米国聖公会——並びに外的——プロテスタント系教派の組織成立への動き——要素の作用によって統合への機運がたかまつていたことも日本聖公会という組織の統合に有利に働いた。彼がリーダーをつとめた北インドへの伝道団はSPGからの資金援助を受けたこともあつて、彼はSPG系の宣教師と見られがちであつたが、ビカステス家は高位聖職者を輩出した家柄であり、父親も当時エクセター教区主教をつとめ、CMSの会長でもあつたから、三ミッションの協力を得やすい立場であつた。そのような時代的、個人的背景の下に、ビカステス主教の優れた政治的手腕がうまく発揮されたと言えよう。

彼は聖ヒルダ会を設立したことで知られるように、女性への伝道、教育にも関心を持ちその必要性を深く認識していた。当時女子学習院及び東京高等師範学校で教鞭を取つていた津田梅子が『ジャパン・デイリー・メール』一八九八年十一月号に寄稿した文章に触れたことによって、彼の日本女子教育への理解と関心が深まったことが彼の伝記に言及されている。²⁸

津田梅子は女性のための学校設立を企画していたが、彼女の志を知つたビカステス主教夫人を中心とする英国女性達

の支援によって、一八九八、九九年に英国に留学し、オックスフォード大学で学んだ最初の日本人女性となった。

一方、ビカステス主教は「皇室のための祈り」「帝国議会の為のいのり」の草案をつくった主教としても知られている。この事実は現代の日本人から見れば、多分に奇異な感じをいだかせるが、彼は日本伝道が進捗すれば英国教会が、母国に対して占める位置に日本のキリスト教も達する可能性に疑いを抱いていなかった。彼を含む芝派の宣教師たちは天皇制絶対主義体制に傾いていく日本に余り危惧を抱くことはなかったようである。また周囲の日本人達も、芝派の宣教師たちが母国に抱く愛国心に共感を覚えて、これが彼等に対する親近感を深めたもう一つの要因ともなった。

ビカステス主教は、恵まれた資質とたゆまざる日々の努力によって身につけたと思われる優れた識見、広い視野、高い理想を持ち、人格的にもリーダーにふさわしい人であった。従来から強健ではなかったビカステス主教は、日本や韓国で主教として務めた多忙な職務によって次第に健康が蝕まれ、帰国中の一八九七年八月五日に四十七才で惜しまれつつ逝去した。

聖公会神学教授、立教大学総長も務めた塚田理は芝派の宣教師について以下のように締めくくっている。

「彼らは日本にいわば優越者としてやってきた。元々これらの宣教師達は本国においてもエリートであって、いずれも最高学府の卒業者であった。彼らが身につけていたヒューマニズムはこうしたエリートのヒューマニズムであって、いってみれば余裕を持ってほかの、そしてとくに下位の文化や民族、国民を受け入れる寛大さがあったのである。

彼らの理念は階級的差別を廃するものであったが、彼らが実際に行った行動は指導者としての、エリートとしての被抑圧者への救済

活動であり、また啓蒙運動であった。彼らは問題点の指摘、社会への批判、被抑圧者の自立性、自己訓練を促したが、政治的社会的な変革の実践的プログラムを提示することはなかったし、また彼らの中の一員として行動することはなかった。この意味では「貴族的ヒューマニズム」に留まったといつてよいであろう。」⁽²⁶⁾

6. アリス・ホアー——LAが派遣した日本最初の女性宣教師——（一八四五—一九二二）

アリス・エリナ・ホアーはLAが一八七五年に初めて日本に派遣した女性宣教師である。彼女についての研究は僅かに白井堯子によるものがあるのみで、彼女についての個人的な情報は殆ど残されていないと言つて良いであろう。彼女について現在までに判明していることは、一八六一年の国勢調査によると、生年は一八四五年頃で、英国デヴォン州、ダヴェンポートが誕生の地である。当時、母親エリザベスは五十五歳で製造業者未亡人とある。アリス本人については十六歳で学生と記されている。家族は他に姉もいるが、使用人も置いているところから、社会階層的には中流の暮らしと言えよう。

この十年後の調査で、彼女はロンドンのホーム・アンド・コロニアルの寄宿舎に居住しているところから、この英国最初の師範学校で学んだことは明らかである。この学校は、英国でペスタロッチの理想を取り入れて設立された最初の学校でもあった。

彼女は来日後二十一年にわたり日本の女性にキリスト教を伝え、多くの女性信者を育てた。彼女が日本で最初に宣教の仕事をしたのは慶應義塾キャンパス内の福沢家の二階であった。彼女が福沢家に滞在したのは一年半の期間であったが、その間、福沢は家賃を無料にしたばかりでなく、家具や教具などを貸したうえ、キリスト教教育を受けることに

なる少女達を集めることまで協力した。福沢がホアの活動にこれほど助力を惜しまなかったのには英国女性を観察するという彼なりの目論みがあったとされている。

ホアの給料は年額百二十ポンドで、二百五十ポンド支給される男性宣教師の半額以下であった。最初の書簡で、彼女は家賃、家具、本などの教材費の援助として百二十ドルを願っている。福沢の家を出た後、ホアはショウ家の新居の横にSPGからの特別な援助によって小さな教室兼自宅の建物を建てた。当時外国人が居留地外に居住することは出来なかったのだが、これを可能にしたのはショウの持つ英国公使館付き牧師という特権であった。

本論の主人公バーケンヘッドも東京到着時にアリスと姪のアニー・ホアに手厚くもてなされたことに深く感謝している。

7. ヒュー・ジェームズ・フォス（一八四八～一九三二）写真8

ハナ・マリア・バーケンヘッドが女学校開設の使命を担って来日した当時、SPGから派遣された宣教師として神戸に在住していたのはヒュー・ジェームズ・フォスであった。ハナが神戸に到着した一八八八年十二月から、置き手紙を残して姿を消す一八九二年七月までの三年七ヶ月を彼らは神戸で共に時を過ごしたことになる。では、フォスとはどのような出自の人であったのだろうか。

ヒュー・ジェームズ・フォスは一八四八年六月二六日、英国ケント州カンタベリー、ロワー・ハーズの生まれである。父親、エドワード・フォスの経歴についてオックスフォード大学出版局による『英国人名録』（英国伝記辞典とも訳されている）に記載されていることを要約する。

「エドワード・フォス（一七八七―一八七〇）職業は伝記作家。一七八二年にロンドンで出生。父親は事務弁護士（法廷弁護士と訴訟人の間を取り持つ業務を行う。収入的には前者よりはるかに多い。――筆者注）であった。父親の下で実務を学び、パートナーとはなったが、結局のところ、法廷弁護士にはなっていない。父親の死後、一八四〇年までその仕事を続け、退職。一八四四年にカンタベリー州、一八六〇年にドーヴァー、一八六五年にアディスコウムに移住。若い時から法律に関わる仕事に従事する一方で、文筆活動に興味を持ち、特に法律家関係の伝記などを執筆し、その分野では認められる存在となった。一八一四年に最初の結婚をしたが、その妻と一人息子を幼時に失い、一八四四年、五十七才で歯科医の娘と二度目の結婚、六人の息子と三人の娘を設けている。長男、エドワードは法廷弁護士となって、父の仕事を助けた。」

ヒュー・ジェームズは父親が六十一才の時に出生し、三男であった。兄弟と共に、カンタベリーの私塾で初等教育を受けた。その後、J・Oシーガー師の学校に学び、一八六〇年一月、十一才半の時に、マールバラ校に進学している。彼が受けた教育というのは、当時の貴族やジェントリー階級など上流家庭の子弟に施される教育の典型的なものであった。

十九世紀初期の代表的なパブリック・スクールには、イートン、ウインチェスター、ハロー、ラグビー、ウエストミンスター、チャーターハウス、ソールズベリーなどがあった。パブリック・スクールは、ローカルな存在であった文法学校に対して、全国規模で学生の集まる有名校であり、学費は非常に高額であった（十九世紀中期では、文法学校の学費は年額二十五ポンド程度であったのに対して、寄宿制パブリック・スクールは二百ポンドであった）ために、ここで学ぶことの出来る生徒は資産のある上流階級の子弟に限られていた。

産業革命により、勃興してきた中流階級の要請を受けて、この時期に設立された新しいパブリック・スクールのうち代表的なものの一つがフォスの通うことになったマールバラ校であった。これらの新規に設立された学校は、中産階級の要請に沿う意図をもって設立された財団により運営されたため、特定の職業と連携する性格を持つものとなった。例えば、エプソム―医者、マールバラ―牧師、ウエリントン―軍人という具合であった。

当時はジェントリーなどの地主階級でも、二男、三男は土地の分割を避けるために、聖職者、軍人になるのが通例であったから、マールバラ校で学んだフォスが、牧師になることは最も適切な職業選択であった。彼の家族も彼の資質から考えて、将来的にそのような道に進ませることが、適当であると判断したのであろう。表9は当時の社会階層と職業との関連をよく示している。

↑パブリックスクール オックスブリッジ卒業者↓	貴族		上流階級
	ジェントリ		
ジェントルマン	(イ) 国教会聖職	(1) 商工業ブルジョワ階級	中流階級
	(ロ) 法廷弁護士	(2) 上欄以外のプロフェッショナル	
↓	(ハ) 内科医	(3) 中小工業者、職人、商店主など	
	(ニ) 上級官吏	(4) 借地農、農民	
↓	(ホ) 陸軍士官		
↓	(ヘ) 海軍士官		
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			
↓			

表9 村岡健次著『ヴィクトリア時代の政治と社会』より

パブリック・スクールで学んだ国教会派の富裕層の子弟はその後オックスフォードかケンブリッジに進学するのが既定の路線であった。フォスの場合は、第一希望であったオックスフォードの二つのカレッジ、モードリン、リンカーンのいずれからも奨学金を得ることが出来なかった。彼の長兄は、オックスフォード・ペンブルク・カレッジで学び、法律家の道に進んでいるおり、フォス自身もマールバラ校の出身者の多くが進学するペンブルク・カレッジに進

学したい希望も抱いていたがこの希望はかなわなかった。結局のところ、彼は一八六八年、二十才でケンブリッジのクライスト・カレッジに進学した。長兄は父親の職業であった事務弁護士 (solicitor) ではなく、法廷弁護士 (barrister) になっているから、よほど資質に恵まれていたのであろう。フォスは一八七一年トライポスに合格、古典学、神学の B・A、一八七四年 M・A を取得した。ケンブリッジ時代に彼は同大学のペンブルク・カレッジに在学中のエドワード・ビカステス (前述) と知り合いになっている。

フォスはマールバラ校およびケンブリッジ大学の在学中に、いろいろなスポーツ、クリケット、フットボール、長距離走、競歩、登山、ボートなどの競技に親しんだ。これらの競技の中で、彼が特に能力を発揮したのは競歩、長距離走であったと自伝に記している。若い日にスポーツに馴染んだことで、彼は長年に亘る外国伝道の生活にも耐え得る強健な体を作り上げた。もっとも日本人がオックス・ブリッジは英国の最高学府であり、学問の聖地でもあるような錯覚をしていることを小山騰氏は自著で指摘しているが、この事実も我々は認識しておくべきであろう。オックス・ブリッジの目指すところはあくまで心身の陶冶によるジェントルマン養成ということであつたから、フォスが在学中身体の鍛練に打ち込んだことは当然のことであつた。そして英国では「二十世紀になつてもなおジェントルマンを規定するものは、やはり有閑階級の生活態度とジェントルマンの教養なので」²⁷ あつた。この英国ジェントルマンとしての暮らしぶりは来日後も守られていたようで、彼は居住地に近い山麓を日々跋涉し、夏期には六甲山にある二軒の別荘でくつろいだ。ローズハウス図書館に保存されているアルバムには、彼が神戸港でボートを漕いでいる姿や、箱根の湖畔で戯れる四主教 (ビカステス、ファイソン、マキム、フォス) の姿などが残されており、米国聖公会系の宣教師の生き方とは全く異なつた英国国教会系高位聖職者の日常生活に見られる一種のエスプリ・デユ・クール (階級連帯感) といった雰囲気を与え

ている。

フォスは『日本聖公会古今聖歌集』発行に貢献した人として知られるように、言語的な能力に恵まれた人であった。これはおそらく文筆活動で知られた彼の父の能力と興味を受け継いだものである。しかし一方、彼の自伝、あるいは彼についての評伝は、彼が宗教儀式などにおいて形式にこだわる人であったことも伝えている。それは例えば、祭服（サープレス）へのこだわり、礼拝中に会衆にある箇所では拝礼をする形式を守るように求めたことなどであるが、むしろこのささやかな事実の中に、彼の本質が覗いているということは否めない。これは、後に述べる（第三章）本論の中心人物、バーケンヘッドの失踪事件後に彼の取った言動からも感じられることである。彼は失踪した「迷える一頭の子羊を」探し求めるどころか、この事件が母国でどの様に報ぜられるかを懸念するひとであった。この彼の言動は「道を伝えて、己を伝えず」、墓に墓石を置くことさえも拒んだウイリアムズ主教の生き方とは余りにも鮮やかな対比を示しており、彼の伝道者としての資質にいささか疑念を抱かせるものである。

ヒュー・ジェームズ・フォスの来日まで

フォスの自伝によれば、彼は大学卒業後すぐにリヴァプールで副牧師になった。二年間その職を勤めた後、一八七四年の春からチェスターの二つの教区で勤務することになった。しかし彼にとってこの配置換えは何故か意に添わないところがあったようである。理由の一つとして考えられることは、将来の地位とそれに付随する処遇の問題であろう。高位の聖職者と単なる教区牧師では地位に伴って収入にも格段の相違があったことは事実であるが、二代続きの事務弁護士という裕福な家庭出身の彼がけっして収入にこだわっていたわけではないことは幾つかの事実が証明している。彼は

リヴァプールを去るに当たって、自分の給与から必要経費を差し引いた残額全部を教区に寄付して離任したこと、当時から副収入があったと言う事実がある。神戸時代には自宅以外に六甲山には二軒の別荘も所有していた。経済的には恵まれたうえに、彼は経理の才に恵まれていたと思われる節がある。彼はむしろ将来の地位——例えばチェスター大聖堂の役職のような——に就任する希望を抱いていたのではないだろうか。またチェスターに移動するよりも、新興都市リヴァプールに残ることに何故か執着を見せている。

チェスターの教会勤務を始めて約一年半後の一八七五年十一月、彼は突然に日本伝道を決心する。

「一八七五年十一月十四日、外国で宣教活動をしている人々のための祈りの季節のことだった。私は大勢の教会学校の生徒を連れ、チェスターの聖ペテロ教会の礼拝に出るために町を歩いていた。その時、「日本に行こう」とひらめいた。「英国を離れ、インド人と議論を戦わせたり、未開人に文明の手ほどきすることなどはとてもできないが、日本では古い宗教を捨てつつあり、キリストの教えを受けいれる素地もできはじめているようだ」と。私は独身でもあり、兄弟姉妹も多く、家に束縛されることもなかった。私の決心は固まり、信頼する友人で、聖ペテロ教会の主任司祭のJ・H・アチソン師に相談し、主教の許しを得たあと、SPG「英国福音伝道教会」に外国伝道の希望を申し出た。」

彼は当時の手続きに従ってSPGの本部で面接試問を受けた。現在ローズハウス・ライブラリーに保存されている彼の志願書には表10のとおり記載されている。

- 一、氏名…ヒュー・ジェームズ・フォス師
- 二、英国の知人の住所、フォス夫人（母親）フェンショウ・ハウス、ボイデン
- 三、協会への加入時期、記載なし
- 四、推薦母体、試問委員会
- 五、伝道目的、記載なし
- 六、協会との契約条件、記載なし

表10 フォスの志願書写し

フォスの来日と主教への叙任

ヒュー・ジェームズ・フォスは一八七六年七月六日に聖バルナバ協会の副牧師であったF・B・プラマー、叔母のミス・ハッチンズを伴ってリヴァプールから出航した。七月十六日にニューヨークに到着。鉄道で大陸横断後、八月一日、「アラスカ号」でサンフランシスコを出航、八月二十六日に横浜に入港した。すぐに上京してアリス・ホアーやショウに面会した。当時東京にはライトとショウ二人の宣教師と米国聖公会のウイリアムズ主教がいた。

彼がプラマーと共に最初の赴任地神戸についたのは一八七六年九月二十一日である。当初彼の仕事とえば、日本語の学習とユニオン・チャーチで行われる英国人（英国船員、英国人居住者）のために礼拝を行うことであつた。彼は一八八九年までの十三年間をこの教会で非公式にチャプレンとして働いた。同僚として赴任してきたプラマーは一八七八年頃に健康を害して帰国した。

一八七八年にはチェスター時代からの知己であったヘンリー・ヒューズが神戸で開校した男子校の設立、存続に彼も協力したようである。またそのころ既設の建物を購入し、最初はチャペルとして使用したが、一八八〇年にはここに教会を建て、聖ミカエル教会と名付けている。

一八八〇年、彼は病気の叔母に伴って帰国し、英国に滞在中、最初の結婚をしている。相手はチェスターの医師ウィリアム・マツキューエン博士の娘であった。この妻は一八九三年にマラリアを病む息子連れて帰国中に急死した。

日本人信徒数の増加に合わせて日本各地——九州、北海道、大阪——を管轄する主教が任命されたが、この人選は全てカンタベリー大主教に任されていた。一八九七年、大阪教区主教に任命されたのは、オックスフォード大学出身のオードリー主教であったが、この主教夫妻は来日後、しばらくの間フォスの自宅に夫妻で寄宿していた。任地の大阪には他宗派の主教が複数在任しているということもその理由であった。

一八九七年にビカステス主教が逝去すると、その後任にオードリー主教が南関東教区主教に、大阪教区主教の後任にはフォスが任命された。フォスの主教叙任式は一八八九年二月二日にウエストミンスター大寺院で行われた。この叙任式に、英国留学中であつた津田梅子が招待された。しかし彼女は、結果的には、この叙任式には出席していない。

日本で女子教育の学校を設立したいという津田梅子の志を知ったビカステス主教夫人の働きかけによって彼女の英国留学は実現したものであつたが、彼女はオックスフォード大学で学ぶ、数少ない女性としてオックスフォードに滞在していた。二月二日のフォスの叙任式当日は、ロンドンに滞在中ではあつたが、他のスケジュールと重なるために出席しなかつた旨を日記に記している。⁸⁰ 同日にミス・ウエルドという詩人テニソンの姪に当たる女性が梅子の為に開いた昼食会に招待され、何人かのオックスフォードの女性達に紹介されている。梅子はこの私的な会合で静かで楽しい時を過ごし

た旨を日記に留めている。昼食会に引き続いて、同日の夜には彼女は加藤大臣夫妻の為にジャパン・ソサイエティが催したパーティにも出席している。その会合で彼女は多数の未知の日本人と、何人かの知己に会っているが、加藤大臣夫妻からは四月の帰国時に同道するようにと誘いを受けた。

『津田梅子文書』のこの部分の記載で興味を引くのは、当時のオックスフォード大学では女性が正式の学生としては受け入れられていないという事実である。女性はただ「講師の好意によって参加を認められているに過ぎない」という当時の英国における女性教育の一断面が梅子によって明らかにされている。

第二章 注

(1) レイデイズ・アソシエーション：一八六六年にW・T・ブロック師によりロンドンで創立された団体で、きっかけは特に悲惨な状況に置かれていたインドの少女達に教育を施すことであった。後に南ア、東洋にも教師、宣教師を派遣したが、一八七六年のホアの派遣は日本での活動の嚆矢となるもので、かなり早期のものである。女子教育に力を注ぐことで、対象国を文明化、キリスト教化することを目指した。創立当時の会員数は約一万人で、SPGとは関連が深いが資金的には独立した団体であった。(紀要第四十六号、拙稿参照)

(2) *SPG Ladies Association Annual Report 1888*. p.26

(3) *The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts* (英国海外福音宣教会) の略。CMSと並び、一九世紀に海外宣教を行った二つの国教会系宣教団体の中の一つである。(紀要第四十六号、拙稿参照)

(4) *CWW* 185.

(5) Church Missionary Societyの略。教会宣教師協会、アフリカと東洋の宣教を目的に設立された。初代会長ジョン・ヴェンは一八六九年に来日している。

(6) 著者シリル・パウルズは長野県軽井沢生まれ。トロント大学トリニティ・カレッジ教授。父はM・S・C・C・パウルズ主教、日本に宣教師として滞在したことがある。

(7) 小川圭治編著『日本人とキリスト教』二五八頁～二五九頁。

(8) この額は一八七二年当時のアメリカン・ボードから派遣された宣教師の千ドルと比べるとかなり低額である。

(9) 白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち——知られざる明治期の日英関係』、八十四～八十五頁。

(10) archdeacon——副主教と訳されていることもある。主教の、特に事務上の補佐的な仕事を務める。

(11) 白井、一一〇頁。

(12) ハイチャーチマン。ハイチャーチ派とは厳密にはオックスフォード大学セント・ジョーンズカレッジ出身者であるのだが、この場合はハイチャーチ的という意味で使っているのであろう。

(13) パウルズ、六二頁。

(14) 後に『信越新聞』主筆となった牛山雪鞋は『キリスト教信越伝導史』のなかで、遭難の危機を救出してくれたショウとの劇的な出会いについて述べている。

(15) 例えばアーネスト・サトウの日記一九七頁には次のような記述がある。

「・・・一八九七年（明治三〇年）八月九日…ピカステス主教の葬式にオードリー、マキム、エヴィングトン、エクセター主教、シリ

ル、サミュエル・ビカステス、ロバート・オットリー、バルフレイ主教座聖堂参事会員と出席。」「同十日「調停証書の新しい謄本に署名しその証書等を「アラン」シャンドに渡した。彼は「大執事のA・C」シヨウが主教になることについて私に賛意を表し、さらにシヨウの二人の息子達は彼等の自力だけではうまくやれていないとのこと。バートンはシヨウに届けるように（彼等の）成績の概略をコピーしたものをくれた。そこで私は帰途それに目を通して、彼にそれを送るようにと命じた。」

シヨウが自分の息子達の教育について頭を悩ませていたことは、本稿に引用した彼の書簡（USPG D 105A）にも記述がある。

(16) オードリー主教、一八四二年生まれ。オックスフォード・ベリオル・カレッジに学ぶ。一八六七年司祭叙任。その後二〇年間教育活動に従事、チチェスター神学校長等歴任。一八九五年主教叙任。一八九六年日本聖公会に六つの地方部設立に伴い、大阪教区初代主教就任。一年後ビカステス主教の逝去に伴い、東京南部地方部第二代主教となる。一九〇八年英国で逝去。

(17) 宮内庁編『明治天皇記』第十卷、吉川弘文館、一九七四年、二二三頁。

(18) フェロウとは広義のことばであるが、オックスフォード、ケンブリッジ、トリニティ・カレッジではかなり限定された意味で用いられていた。彼等は大学の統制的な任務を担うと同時に、幾つかの特権——個室、俸給などの——特権もあたえられていた。

(19) 津田^{つだ}仙^{せん}、天保八年（一八三七）生まれ。佐倉藩士。農学者。同志社大学・青山学院大学・筑波大学附属盲学校の創立に関わる。また、日本で最初に通信販売を行った人物でもある。同時に敬けんなキリスト教徒で、同志社大の創始者新島襄、人間の自由と平等を説いた東京帝国大学教授の中村正直とともに、「キリスト教界の三傑」とうたわれた。

津田塾大学創設者の津田梅子は彼の娘である。

(20)アーサー・メイ・ナップ（白井、二三五頁）ユニテリアン派のアメリカ人宣教師。この新神学は基督教研究、聖書研究に歴史的批評的な方法を採用し、伝統的な教義の拠って立つ三位一体説を否定し、イエスの神格を否認するなどした合理主義的な神学思想であった。

(21)矢野文雄（竜溪、一八五〇―一九三二）は佐伯藩出身。近代日本の建設に大きな影響を与えた人物の一人で、教育者、政治家、社会思想家、ジャーナリスト、文学者としても知られる。矢野は福沢の紹介で参議大隈重信と知り合い、明治十一年（一八七八）には大蔵省に書記官として入ったが、その後、太政官に移って、統計院幹事兼太政官大書記官となっている。あるいは福沢が提唱した交詢社の設立委員・常議員にも名を連ね、小幡篤次郎、馬場辰猪、中上川彦次郎等と共に「交詢社私擬憲法案」を作成して、『交詢雑誌』に発表しているが、これを踏まえた意見を奏上した大隈が「明治十四年政変」に巻き込まれ、大隈系と見られた矢野も罷免された。こうして下野した矢野は、イギリス流の議院内閣制を目指す東洋議政会を組織して、大隈が明治十五年（一八八二）に結成した立憲改進党の一角を担うと共に、西洋の名宰相・忠臣を扱った政治小説『経国美談』を発表している。

さらに彼は国会開設前に西洋諸国の諸制度を調査するため、ヨーロッパ外遊に旅立っているが、ロンドンから送られた海外通信は報知新聞に「周遊雜記」として掲載され、この中でユニテリアン（個々の「教派」を超えた超教派的キリスト教「運動」）が初めて日本に紹介され、これを高く評価する矢野が日本の国教にすることを説いている点、見逃せないところである。福沢も、矢野の要請によってアメリカのユニテリアン教団から明治二十年に派遣された宣教師ナップと出会い、多大な影響を受けた。

(22) 白井、二二九頁。

(23) 覚前政蔵——撰津国有馬郡名塩村出身。元治元年十月十一日生。大正十三年五月二日没。ロイド師との旅先からのたよりが『日曜叢誌』（聖教社発行）一八九一年一月号、三月号に採録されている。

(24) 井上哲次郎「学者としてのロイド博士」『学燈』（一九一一年十二月）、十二頁。

(25) *Life and Letters of Edward Bickersteth, Bishop of South Tokyo*, pp.189-192.

(26) 塚田 理『初期日本聖公会の形成と今井寿道』二三一―二三二頁。

(27) 小山 騰『破天荒〈明治留学生〉列伝』二二七頁に左のような下りがある。

「教育は彼等『日本人留学生』にとって宗教そのもののように神聖なものである。彼等はオックスフォードやケンブリッジを、若者が楽しみに行く所だとは思っていない。英国の若者は、そこで三年の間、毎年六ヶ月は遊び暮らして、身分不相応な贅沢な暮らし方を覚え、体力があれば、せいぜい陸上競技かボートで評判になるだけなのだ……」

(28) 村岡『ヴィクトリア時代の政治と社会』百五十四頁。

(29) 史料集 三―七頁。

(30) 『津田梅子文書』三一八頁。

第三章 日本での日々（「研究紀要」第四十七号に掲載）

第四章 カナダへ

1. 日本出国と結婚

バーケンヘッドがいつ、どの様にしてヴァンクーヴァーに到着したのかは明らかでない。彼女が日本で残した最後の足跡は、一八九三年度出版『幕末明治在日外国人機関名鑑』（表14）に見ることが出来る。しかし次年度の一八九四年度版では彼女の名前が同伝道団からは消えている。また同じ名鑑の他の箇所にも見つからないところから、彼女が離日したのは一八九三年であつたと推察できる。

当時横浜居留地で発行されていた『ザ・ジャパン・ウィークリー・メール』紙は横浜に入港する船舶で出入国した人々の氏名を記載している。同紙を一八九三年度、一八九四年度の二年分にわたって点検したが、この間の出国者の中に彼女の氏名を見出すことは出来なかった。尤も、同紙に乗船者全員の氏名が記載されていたわけではなく、英国女性一名というような形式での記載もあつたから、氏名を明らかにすることなく出国した者があつたわけで、そのような氏名不詳者中に彼女が含まれていた可能性もある。また横浜港以外から乗船した可能性も考えられるところから、当時、外国航路に船を運行していた船会社にも問い合わせたのだが、個人情報保護を理由に当時の乗船名簿などの公開はして貰えなかった。その後、インターネットによる検索で、カナダのブリティッシュ・コロンビア州の州都、ヴィクトリアの公文書館に彼女の結婚記録及び彼女の夫の死亡記録があることが判明した。後日、それぞれの文書のコピーを入手した。この記録によれば彼等の挙式は一八九六年三月二十一日であり、新郎リチャード・プライスはアイルランド生ま

AMERICAN METHODIST EPISCOPAL MISSION

YOKOHAMA

Rev. G. F. Draper 222-B, Bluff

Mrs. G. F. Draper 222-B, Bluff

Mrs. C.W. Van Petten, 221, Bluff

Miss M. E. Simons. 221, Bluff

Miss H.M. Berkenhead (sic), 221, Bluff

表14 The Japan Directory (1893) p. 48

れの四十八歳でメソヂイストの信者、ホテルの所有者となっている。(資料1参照) 新婦ハナ・マリア・バーケンヘッドは英国チェシャー生まれの三十八歳で英国国教徒と記載されている。しかし夫のプライス氏は死亡届(資料2参照)から逆算すると、結婚当時六十七歳であった筈であり、ハナは出生記録から計算すれば、四十歳というのが正確な年齢であったと思われる。ヴィクトリア朝の当時では、二、三歳の年齢のずれは珍しいことではなかったようであるが、夫のように二十歳もの差異は意図的なものと云われても仕方がないであろう。

しかしながら彼女は結婚後、余り時を経ずして夫の元を去ったと推察できる。それは一九〇一年の国勢調査(資料3参照)に記載されているプライス氏の同居者の中に彼女の名前を見ることが出来ないからである。また、後の調査から、夫には娘が一人あることになっているが、この娘は年齢的にみてバーケンヘッドが母親ではないと考えられる。

2. プライス兄弟

ここで彼女の結婚相手、リチャード・プライスとその家族について調査で判明した事実を記しておく。

彼は一八九六年の結婚当時、ヴィクトリアにあるホテル、シックス・マイル・ハウスの所有者であり、アイルランドから移民してきた三兄弟の二番目の男性であった。彼等は、当時その地域ではプライス三兄弟として名を知られた存在であった。兄弟の中で最初にこのホテルのオーナーとなったのは長

兄のヘンリーであった。彼は腕利きの料理人として評判がよく、その人柄の故にこのホテルは当時繁盛していた。彼の死後に次弟のリチャードが跡を継いでホテルの経営者になったのであった。その後このホテルの所有者は次々とかわり、現在は中国系の王氏が経営しているが、現在もヴィクトリア最古のパブとして未だに人々が寄り集まる場所である。建物は何回か改修され、ヴィクトリア朝当時の面影を残すものはそのファサードと、建物の傍を流れる小川だけであるということである。また六マイルというのは、当時ヴィクトリアにあった城塞を起点とする距離である。

当時の新聞記事並びに、近年になって書かれたそのホテルの歴史を記録したパンフレットなどを手がかりにこのプライス兄弟が経営したホテルについて述べてみよう。

3. シックス・マイル・ハウスの歴史

十九世紀の第二四半期は、英国にとってカナダ、オーストラリア、ニュージーランドへの移民の時代であった。この人口流出の原動力は、この時期ブリテン島が人口過剰となったこと、更には、イギリスの農業労働者が惨めな状況にあったためであった。

ハドソン・ベイ・カンパニーに雇われてヴィクトリアにやってきたウイリアム・パーソンズという人物が一八五四年に現在シックス・マイル・パブ（写真12）が建っている場所に四十エーカーの土地を購入し、一年後そこにホテルを建てた。この建物は木造平屋建て、周囲を幅広のヴェランダがぐるりと取り囲むようにして付設されていた。この建物の裏側には川が流れ、水車が設置されていた。彼はその建物をパーソンズ・ブリッジ・ホテルと命名した。パーソンズはこのホテルを一八五七年に手放し、その後このホテルは数名の所有者の手に次々と渡った。彼等のうち、ある所有者は

実質的な営業にあたり、また単に名義だけの所有者となつた場合もあつたようである。

長兄のヘンリー・プライスがこのホテルを六千ポンドで購入したのは一八七七年のことであつた。結果として、このホテルの歴史上、最も長期に亘る所有者となつたのはプライス家である。このホテルの所在地近くには現在もなお存続している海軍基地があるが、その施設への食料補給、郵便の中継地点としての利用、あるいはピクニック・サイトとしての利用などという利便性から、どの時期にも商売はかなりうまくいつていたようである。筆者が二〇〇四年に訪れた際も、ブリティッシュ・コロンビア最古のこのパブは昼食を摂る近隣の人々でにぎわっていた。

アイルランド籍のヘンリー・プライスは一八六一年にリヴァプールをアザラシ獵船セレスシアで出航した。当時はブリティッシュ・コロムビア州を流れる川でゴールド・ラッシュが起こっていた時代であつたが、彼もその歴史の潮流に身を任せてフレイザー川を遡った。彼はなかなか目先の利く人間であつたようで、金そのものより金採掘関連の事業でかなりの財をたくわえた。結局、彼は後に呼び寄せた二人の弟を伴つて現在のパブがある場所に落ち着いた。その後も彼はホテル経営を人に任せて、クロンダイクのゴールド・ラッシュに身を投じたこともあつたが、結局はこのコルウッドの地に戻っている。以後二十八年間、ヘンリーはここで過ごし、結婚して一女をもうけている。その娘もデイ氏と結婚後、近年逝去したと新聞記事は伝えている。ヘンリーが一九〇九年に亡くなり、次弟のリチャードが跡を継いだ。この男性が、バーケンヘッドの結婚相手である。リチャードがどのような人物であつたのかは、一切不明である。彼は亡くなるまでホテルの経営にあたつたが、彼の死後は甥になるジムが相続した。

ハナ・マリア・バーケンヘッドがヴィクトリア到着の三年後に結婚式を挙げたメソヂストの教会は現在もヴィクトリア朝の面影を僅かにとどめている歴史的地区の古い町並みの中に残っている。しかしその建物自体は煉瓦の地色を隠

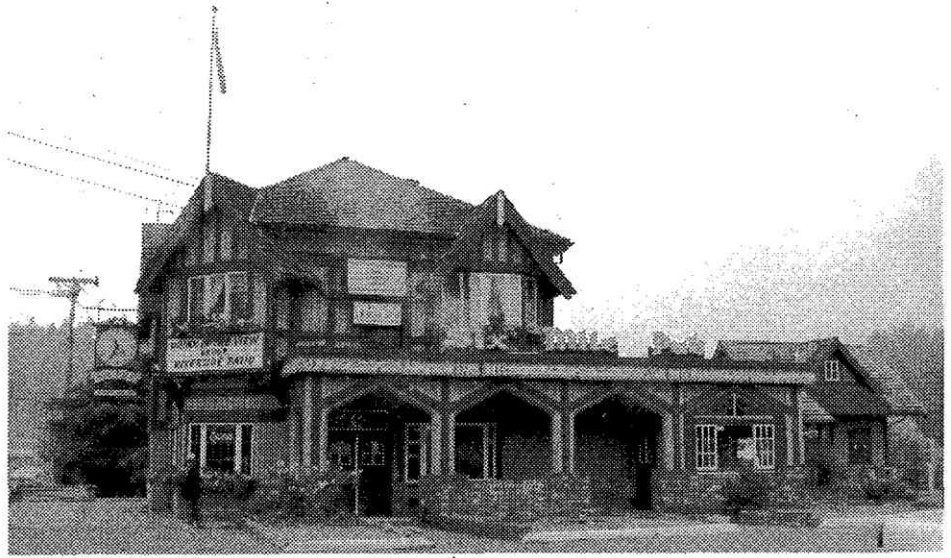


写真12 シックス・マイル・パブ

著者撮影

すかのごとく黄色一色に塗り替えられており、番地で確認しない限りは、その建物がかつては教会であったとは想像する事は困難であろう。

バーケンヘッドは結婚後五年以内に夫の許を離れている。その事実は一九〇一年に行われた国勢調査（資料4）によって明らかである。バーケンヘッドが結婚した相手のプライス家の人々については、当時発行された新聞、あるいは国勢調査などによって辿る手がかりが僅かに残されているが、ヴィクトリアを離れて以後のバーケンヘッドの足跡は現在のところ不明である。ヴィクトリアが彼女の終焉の地ではないことは、公文書館に彼女の死亡記録が残されていないという事実が物語っている。彼女がその後、母国に戻ったか、或いは当時英国の植民地であったいずれかの国に移住したかどうかは、現在のところ突き止められてはいない。

その追求を困難にしている大きな理由は以下の二つである。一つは、仮に彼女が再婚していた場合の姓が不明であることであり、二つ目は、百年以上経過していない個人情報（出生、結婚、死亡に関する）は血縁者以外には公開されないことである。念のために申し添えておけば、彼女の結婚以前の姓であるバーケンヘッド、或いは結婚後のプライス姓何れによる検索も、該当する死亡記録が英国及びウェールズには存在していないということは確認している。

以上のような理由で二〇〇三年初頭に着手したこの調査もここで終わりにせざるを得ない。私個人としては、考え得

るだけの方法でこれまでの調査を進めてきたつもりである。日本、英国、カナダの各地で多くの人々から全く予期していなかったかたちで、私の調査にご支援を戴いたことを深く感謝しながら筆を擱くことにしたい。

第二章、第四章 参考文献

邦語文献

- 『松蔭女子学院 史料』第一集、松蔭女子学院（神戸）、一九九四年。
- 『松蔭女子学院 史料』第二集、松蔭女子学院（神戸）、一九九五年。
- 『松蔭女子学院 史料』第三集、松蔭女子学院（神戸）、一九九八年。
- 『松蔭女子学院百年史』松蔭女子学院校史編纂委員会、一九九二年。
- 秋田 茂編『パクス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ書房、二〇〇四年。
- 石川 幹明『福沢諭吉』岩波書店、昭和二十一年（第三刷）。
- 井野瀬 久美恵『植民地経験のゆくえ——アリス・グリーンンのサロンと世紀転換期の大英帝国』人文書院、二〇〇四年。
- 牛山 雪鞋『キリスト教信越伝導史』銀河書房、一九八〇年。
- 楠家 重敏『日本アジア協会の研究——ジャパノロジーことはじめ——』日本図書刊行会、一九九七年。
- 小川 圭治（編著）『日本人とキリスト教』三省堂、一九七三年。
- 大江 満『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯——幕末・明治米国聖公会の軌跡——』刀水書房、二〇〇〇年。
- 大濱 徹也『明治キリスト教史の研究』吉川弘文館、一九七九年。

小泉 信三『福沢諭吉』岩波新書、岩波書店、一九七七年。

小山 騰『破天荒〈明治留学生〉列伝』講談社、一九九九年。

茂 義樹『明治初期神戸伝道とD・Cグリーン』日本キリスト教史双書、新教出版社、一九八六年。

宍戸 実『A・C・ショオの来歴とその建築の研究Ⅰ』『日本女子経済短期大学研究論集』第四十二号、一九八二年。

『A・C・ショオの来歴とその建築の研究Ⅱ』『日本女子経済短期大学研究論集』第四十三号、一九八二年。

『A・C・ショオの研究（出自と日本赴任）』『嘉悦女子短期大学研究論集』第四十五号、一九八四年。

白井 堯子『福沢諭吉と宣教師たち——知られざる明治期の日英関係』、未来社、一九九九年。

日本聖公会歴史編集委員会編『あかしびとたち——日本聖公会人物史』、日本聖公会出版事業部、一九七四年。

松平 惟太郎著、日本聖公会歴史編集委員会編『日本聖公会百年史』日本聖公会教務院文書局、一九五九年。

松塚 俊三『歴史のなかの教師』山川出版社、二〇〇一年。

村岡 健次、川北 稔編『イギリス近代史——宗教改革から現代まで——』、ミネルヴァ書房、一九八六年。

村岡 健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房、一九八〇年。

栄田 卓弘『十九世紀イギリス史』早稲田大学出版部、一九九三年。

立脇 和夫（監修）『幕末明治在日外国人機関名鑑』ゆまに書房、一八七六年。

タッカー・B・D（著）、赤井勝哉（訳）『日本聖公会の創設者 C・M・ウィリアムズ主教小伝』、聖公会出版、一九九九年。

塚田 理『日本聖公会の形成と課題』聖公会出版、一九七八年。

——『初期日本聖公会の形成と今井寿道』聖公会出版、一九九二年。

英文文献及び翻訳文献

Joseph, A. Banks & Olive Banks. *Feminism and Family Planning in Victorian England*. Schocken Books. 1964. (河村 貞枝訳『ヴィクトリア時代の女性達』創文社出版、一九八〇年。)

Bird, Isabella L. *Unbeaten Tracks in Japan. An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo, and the Shrines of Nikko and Ise*. 1885. (高梨健吉訳『日本の未踏の地』平凡社、一九七三年。)

Copelman, Dina M. *London's Women Teachers, Gender, class and feminism 1870-1930*. Routledge, 1996.

Daniels, Gordon. *Sir Harry Parks. British Representative in Japan 1865-83*. Japan Library, Curzon Press Ltd. 1996.

Forge, Georgiana M. *Missionary Adventures, A Simple History of The SPG.* Skeffington & Son, London, 1911.

Hinchliff, Peter. *The Anglican Church in South Africa, An account of the history and development of the Church of the Province of South Africa*. Darton, Longman & Todd, London. 1963.

Kenrick, Douglas Moore. *A Century of Western Studies of Japan, The First Hundred Years of the Asiatic Society of Japan 1872-1972*. The Asiatic Society of Japan, 1978. (ケンリック・ダグラス・M(著)、池田 雅夫(訳)、市民文化研究センター(編)『日本アジア協会一〇〇年史——日本における日本研究の誕生と発展——』横浜市立大学経済研究所、一九九四年。)

Middleton, Dorothy. *Victorian Lady Travellers*. Routledge & Kegan Pub, London. 1965. (佐藤知津子訳『世界を旅した女性達』八坂書房、二〇〇二年。)

資料 2
リチャード・プライスの死亡証明書

PROVINCE OF BRITISH COLUMBIA
CERTIFICATE OF REGISTRATION OF DEATH

1 PLACE OF DEATH
If in Municipality: *Victoria B.C.* Registered No. *1234*
If in City or Town: *Victoria* Street: *...* House No. *...*

2 NAME OF DECEASED
Residence: *Parsons Bridge*
Name: *Richard Price*

3 SEX: *Male*
4 AGE: *48*
5 DATE OF BIRTH: *August 7, 1848*
6 LAST OCCUPATION OF DECEASED: *Hotel Keeper*
7 CAUSE OF DEATH: *Heart Failure*
8 MEDICAL CERTIFICATE OF DEATH: *...*
9 CONTRIBUTORY: *...*

10 SIGNATURE OF REGISTRAR: *...*
11 DATE: *April 7, 1896*

資料 3
結婚証明書写し

REGISTRATION OF BIRTH, DEATHS, AND MARRIAGE ACT
SCHEDULE B Marriages
Registration District No. 1

No.	2818
His name	Richard Price
Age	48
Residence when married	Parsons Bridge, Victoria B.C.
Place of Birth	A????Cy. Ireland
Condition	B
Rank of profession	Hotel Keeper
Names of parents	James & Elizabeth
Her name	Hannah Maria Birkenhead
Age	38
Residence when married	Victoria
Place of birth	Chester Eng
Spinster or widow	S
Name of Parents	Edmund & Harriet
Name of witness	Maria H. Cleaver, Ida A. Cleaver
Residence of witness	Victoria
Date of marriage	March 21/96
Religious institution of bridegroom	Meth
Religious institution of bride	Church of England
By whom married	S.C.
By license	7011
By	
Remarks	

I hereby certify that the particular given in the above report to the best of my knowledge and information
Dated 7th day of April AD. 1896
Solicitor G. Cleaver

Form 6		PROVINCE OF BRITISH COLUMBIA	
CERTIFICATE OF REGISTRATION OF DEATH			
1. PLACE OF DEATH			
If in Municipality <i>Parson's Bridge (6 Miles House)</i>		Registered No. _____	
For the use of Registrar of Vital Statistics only			
If in City or Town. _____		Street _____ House No. _____	
If in hospital or institution, give name _____			
2. NAME OF DECEASED <i>Richard Price</i>			
Residence _____		<i>Parson's Bridge, 6 Miles House</i>	
Street name of address _____			
PERSONAL AND STATISTICAL INFORMATION		MEDICAL CERTIFICATE OF DEATH	
3. SEX <i>Male</i>	4. RACIAL ORIGIN <i>Irish</i>	20. Date of Death <i>May 26th 1921</i>	
5. Single, Married, Widow, or Divorced, <i>Married</i>			
6. BIRTH PLACE <i>Ireland</i>		21. I HEREBY CERTIFY, that I attended deceased from	
7. DATE OF BIRTH <i>August 1, 1829</i>			
8. AGE Years <i>92</i>	Months Days If less than one day	<i>May 26, 1921</i> that I had saw him live on	
9. LAST OCCUPATION OF THE DECEASED		<i>May 26, 1921</i> and that death occurred on the	
(A) Retired	(B)	date stated above, atp.m.	
(C) From _____ to _____	Date from which to when to applied	THE CAUSE OF DEATH was as follows:	
10. FORMER OCCUPATION OF THE DECEASED <i>Hotel Keeper</i>		Heart Failure	
		CONTRIBUTORY Chronic Valvular Disease	
		+ ??? Years	
11. LENGTH OF RESIDENCE OF DECEASED <i>50 years</i>		22. Where was disease contracted if not at place of death?	
PARENT S	12 Name of father, 13. Birthplace of father	Did an operation precede death? <i>No</i>	
	14. Maiden name of mother 15. Birth place of mother <i>Not known</i>	Was there an autopsy? <i>No</i>	
16. Informant's name <i>Mr J. Price</i>		Signed) ?????? M.D.	
17. Relationship to deceased <i>Nephew</i>		Address ?????? Victoria	
18. Place of Burial, cremation or removed <i>Ross Bay Cemetery</i>		Date <i>May 27, 1921</i>	
19 Undertaker <i>Parson Funeral House</i>		23. District Registrar's Record Number	
Undertaker			
Name and Address		24. Filed MAY 27, 1921	
		????????????????????	
		District Registrar	

資料 4 Richard Price の死亡証明書写し

Line No.	Dwelling No.	Family at Household	Name of each person in family as recorded on 1st March, 1901.	Sex.	Color.	Relationship to head of family as recorded.	Month and date of birth.	Year of birth.	Age at last census.	(If he could not write the name, initials, "P" or "M" may be used, or in the case of the child may be)											
											Description of the Person.										
											Number	Family as Recorded	Name of each person in family as recorded on 1st March, 1901.	Sex.	Color.	Relationship to person as recorded.	Month and date of birth.	Year of birth.	Age at last census.	Place of birth of person.	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11											
1			Long	m	y	black		Oct 25	1866	17	China										
2	55	56	Priest	m	w	black		June 8	1877	16 1/2	China										
3			"	m	w	black			1880	62	"										
4			McIntyre	m	w	black		June 14	1881	40	China										
5			John	m	y	black				18	Japan										
6			Chinaman	m	y	black				40	China										
7	56	56	Thompson	m	w	black		May 11	1879	27	China										
8			Gray	m	w	black		Dec 28	1880	40	China										
9			Gray	m	w	"		Oct 27	1882	17	China										
10	57	57	John	m	y	black		July 29	1887	34	China										
11			Lee	m	y	black		Dec 8	1886	33	"										
12	58	58	Wille	m	w	black		Nov 11	1888	34	China										

Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1901, as taken on 1st March.	
Census of 1901, as taken on 1st March.												Census of 1	

あとがき

神戸に女学校を設立するという呼び掛けに応じてハナ・マリア・バーケンヘッドさんが、日本にやってきたのは一八八八年の十二月である。紆余曲折の末に、彼女が念願としていた女学校が生まれたのは一八九二年一月であるが、その半年後に彼女は、心ならずも辞任する運びとなり、神戸を去った。

バーケンヘッドさんはその正味五年という短い滞日期间中に、日本語はかなりのレベルにまで達していた。彼女は日本を去る少し前に、日本最初の学会である「日本アジア協会」で、唯一の女性発表者として「五十年前の須磨村」という学術報告を行った。当該協会の紀要に収録されているこの報告書は、彼女が、日本の歴史に興味を持ち、史料も読めるほどの日本語能力があった事実を示している。

文才にも恵まれていた彼女が、英国の本部に送った書簡は、彼女の暖かな人柄や豊かな感受性を感じさせるもので、読む者の心を打つ。中でも彼女が淡路島で目にした螢の舞う情景の描写は多くの読者の心に残る一文となっている。

彼女が生きていたヴィクトリア女王の治世は英国が最も繁栄した時代であった。世界一の先進国イングランドは、世界中に植民地を所有し、「日の沈むことのない国」であった。しかしこの豊かな富の恩恵を余すところなく享受できたのは上流階級、長子、男性という三つの条件を備えた人々であった。女性差別は社会階層の如何を問わず厳しいもので、女性が男性並みの教育を受けることは不可能な時代であった。その不利な条件の下で、バーケンヘッドさんは、恵まれた知性と（恐らくは）強固な意志や努力で道を切り開いたのであろう。自ら志願して若い女性に教育を受ける機会を与えるために、カナダを横断し、海を渡ってやってきたのである。

男性宣教師、特に主教のような高位聖職者からは十分な助力、支援を得られず、むしろ疎外される状況下で彼女は何

とか初志を貫徹し、遅れていた日本の女性教育の扉を一つ開いた。

日本を去り、カナダ・ヴィクトリアで結婚をしたバーケンヘッドさんのその後の人生は明らかではない。四十歳という当時としては遅い結婚であり、夫はアイルランド出身の労働者階級で高等教育は受けていない高齢の男性であった。この男性の許も彼女は五年も経たないうちに去っている。その後の彼女の行方は、現在のところ不明である。

彼女が初代校長として在任した期間は半年というほんの短いものであった。現在、百余年に及ぶ松蔭女学院の歴史においてにはほんのひとときであり、まさに地上に孵化して光を放つ蛍のようにその光栄は一瞬の光芒のようであった。失踪後の彼女の人生に幸せな結末を期待して史料を探し求め、何年かが経過した。せめて彼女の終焉の地を確定したいと念願し努力を重ねたがそれも徒労であった。しかし考えてみれば、人は蛍の光を愛でることはあっても、その生涯を終えた蛍の骸を探し求めはしない。私もバーケンヘッドさんが最も美しい光を放った時を心に留めてこの稿を終えることにしたいとおもう。

振り返れば、二〇〇三年の初頭にロンドンのファミリー・レコード・センターでバーケンヘッドさんの出生記録を見つけてから丁度四年の歳月が経過した。本来ならば、その出生記録を本学の史料編纂委員の方々にお渡しして、私の任務は終わるはずであった。それをこのような長期にわたる個人史の調査に私を駆り立てたものは、彼女の失踪の原因が「差別」にあったかも知れないという言葉であった。念願の女学校設立という目的を達成しながら、半年後に置き手紙を残して失踪するという事実には全く不可解であった。合わせて、本学には彼女に関する資料が何も残されていないという事実は、捨て置くことが出来ない思いを私の中に醸成した。逡巡する気持ちを振り切って取りかかった調査ではあったが、全くの庶民であり、女性である彼女の足跡を辿る手がかりは余りにも少なく、ともすれば見失いがちであっ

た。彼女の姿を浮き上がらせるためには、どうしても同時代に活躍した関係者を描くことが必要不可欠な作業となり、膨大な資料に眼を通すことが必要となった。しかし、そのお返しとして私には、日英両国にわたるヴィクトリア朝を立体的に眺める機会が与えられるという、心躍る楽しい経験を得た。また、それまでは全く交流のなかった研究者の方々、特にヴィクトリア朝文化史の碩学から多くのご助言や、示唆を戴いたことは、身に余る光栄であった。

最後に、偶然の出会いによって、私の調査に力を貸して下さった人々に、届かぬ思いながら深い感謝をささげたい。ロンドンでの戸籍調査を手伝って下さったジョン・リングローズさん、ストックポートでの調査で私の足になって下さったカール・ロジャーズさん、血縁者以外の者には入手困難であった証明書二通をヴィクトリアの公文書館から手に入れた下さったチャック・フォーブズさん、シックス・マイル・パブの歴史、『ザ・シンデレラ・シックス・マイル』を書いたエミリー・ストローパさん。皆、偶然に出逢った人々であり、非力な外国人を見かねて力を貸して下さった人々である。

当時、百年は立ち後れていた後進国日本の年若い女性達に教育を受ける機会をあたえようと何千マイルものつらい旅をしてやって来た勇氣ある一イギリス女性の存在なしには、現在の松蔭女子学院は生まれなかったという事実を学院関係者として大事にしなければならぬと心に刻んでいる。唯一の心残りは、バーケンヘッドさんや彼女同様に日本のキリスト教宣教師では忘れ去られている女性宣教師達に感謝の言葉を掛けてあげられないことである。